

二〇二二年度

第一三一回 卒業式

明日への祈り

駿府城公園の早咲きの桜に、城北公園の紅白の梅、そしてアザミの花も満開を迎えようとする今日、晴れて卒業証書を授与された静岡英和女学院高等学校第一三一期生七五名の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

また皆さんの成長を見守ってこられましたご家族の皆様にご心よりお祝いを申し上げます。皆様の本校へのご理解とご協力にご心より感謝申し上げます。

そして三か年、六か年の皆勤をそれぞれ四名の皆さんが受賞されました。敬意とお祝いを申し上げます。どうか共に学んだ学友に、励まして下さった先生方に、そして支えて下さったご家族に感謝を忘れないで下さい。

本日の卒業式には森田拓子同窓会長、大石剛士PTA会長補佐、石橋綾子PTA母の会委員長の皆様にご参列いただきました。卒業生、教職員一同心より感謝申し上げます。

また石井博文理事長、柴田敏学院長、永山ルツ子学長、亀山淳PTA会長、杉山寧後援会長には感染予防など諸事情のため残念ながらご参列が適いませんでした。心温まる祝福を頂戴しております。重ねて感謝申し上げたいと思います。

そして皆さんの成長を祈り見守って下さってきた出身小学校、中学校、関係機関、地域、教会の皆様からも温かい祝福の言葉をいただいています。共に感謝を申し上げたいと思います。

さて皆さんの高校三年間は申し上げるまでもなく、新型コロナウイルス感染症と共にありました。緊急事態宣言下、入学式は一ヶ月遅れとなりました。メイプルコンサ

一トは中止、体育祭は九月に延期縮小、英和祭は十一月に延期縮小、学校クリスマスも縮小されました。それから三年を経て学校の活動は徐々に回復しましたが、二年生のスタディーツアーは伊豆方面となりました。

そして悩ましいのは今も取れないマスクの生活です。入学以来マスクを取ったお互いの顔を見た記憶が定かではありません。今になって根拠もよくわからない中、マスクを取るのは個人の判断と言われてもためらってしまいます。また礼拝では讚美歌も歌えない時がありました。そして段々お祈りの終わりのアーメンも聞こえなくなりました。これも感染症、マスクの生活だったからなのではないでしょうか。百年に一度と言われるパンデミックは誰にとっても初めての経験で、いつ感染するか、どんな影響が残るのか、いまだわからないことばかりです。

そもそも一九九〇年代初頭のバブル経済崩壊から日本は失われた二十年、三十年と言われ、二〇二〇年一月、グローバル主義

社会の先にパンデミックが起きました。そしてロシアのウクライナ侵略、昨年の九月に英和も被災した線状降水帯による豪雨被害はまさに地球温暖化の影響を直接体験したことでした。そしてトルコ・シリアを襲った大地震が起きました。

予測不可能な混迷した時代に、私たちはいます。経済成長、安全安心な暮らし、平和な時代は遠い昔のここのようになりつつあり、これからの少子化問題以上に、今の子どもたち自身が受難の時代の中にあります。

あなたがたは三年間、六年間、毎朝、お昼、一日の終わりに聖書のみ言葉に耳を傾け、他者に心を寄せて共に祈り過ごしてきました。あなたがたが神様に選ばれ、愛されてきた証しです。それは言葉で説明できるものではなく、これからの人生の中で確かめていくものです。どうかこれからもあなたがたは神様に愛されていることを覚え、まず何よりもあなたがた自身を大切に

して歩まれることを祈っています。

今、英和で最後に与えられたのは、

「あなたがたは地の塩である」

「あなたがたは世の光である」

とのみ言葉でした。わたしはあなたがどこへ行っても、どんな時にも、いつも、いつまでもあなたと共にいるという神様からの約束です。他者を生かす塩のような存在でいよう、闇に輝く光のように他者を照らす光でいようという神様からのエールです。

そして最後に「人々が、あなたがたの立派な行いを見て」とありました。「立派な行い」とは成功する、勝者である、称賛を浴びるという意味ではありません。神様から見て立派な行いという意味です。学院聖句の「主なる神を愛しなさい。隣人を自分のように愛しなさい」とのみ言葉に生きることです。「主なる神を愛しなさい」とは、あなたはひとりではないから、わたしがいつまでもあなたの隣にいるからという約束

です。そして「隣人を自分のように愛しなさい」とは、あなたがどんなに遠く離れても、あなたが何もできなくても、あなたが何も言えなくても、絶えず共に祈りなさい、わたしもあなたがたのために祈っているという約束です。すべては見えなくても、見えないお互いを共に見つめ合う、祈り合うことからです。その三位一体の関係から神様の愛は実現していくのです。

卒業は終わりではなく始まりです。お別れではなく、もう新たな出会いと関係へとつながっています。今日の喜びと感謝を、明日への祈りとしましょう。

二〇二三年三月一日

静岡英和女学院高等学校
校長 大橋 邦一